

## 仏典翻訳の歴史とその変遷 ⑥

### 変容と疑經（偽經）の関係

釈迦のことばの正統性を<sup>まこと</sup>纏いながら、中国において独自に制作された經典は疑經（偽經）と呼ばれた。釈道安はそれらを「疑經録」にまとめ、次のように指摘した。

天竺の仏教教団にあっては、伝法の方法（外国僧法学）は皆師から直接相承していくものである。同じ師から10回あるいは20回と繰り返して伝授される。もし一字でも違えることがあれば師と弟子はともに推敲して、ようやく誤りを訂正するしきたりである。（中略）仏教經典が中国（晋）に来てからさほど時は経ていないにも関わらず、悪事を好む者は、砂を金と言ひ素知らぬ顔をしている。誤りを正すことがなかったならば、何をもって真偽を分かつかのであろうか。（落合，2013：168）

釈道安はこのように述べ、正統性が疑わしいと思われる經典を峻別した。また、唐の智昇は『開元釋教錄』に、次のように指摘している。

偽經とは邪見によって造られたものであって真經を乱すものである。大師（ブツダ）が影をお隠しになってから二千年になろうとして魔教が競い興り、正法はすっかり衰損した。頑愚の輩は悪見や迷心をもって諸經を偽造し、流俗を誑惑し、邪言が正義を乱している。何と哀しいことであろうか。（沖本，2010：294）

道安は疑經、智昇は偽經と呼んでいるので両者を合わせて「疑疑經」とすることもあるが、本稿では広義の概念として疑疑の語を用いていく。經録の編纂目的の一つは、中国仏教からの疑疑排除であり、釈迦の真の教えを希求した經録編纂者らの悲憤が見て取れる。

しかしながら、經録において真經と疑疑を区別する判断基準の一つは、經典の出自がインド伝来かどうかであった。したがって、釈迦が直接説いたものではない大乘經典の漢訳もインド伝来のものとして排除の対象とはならなかった。また真偽の判断基準も經録によって相違があったようだ。たとえば『仁王護國般若波羅蜜經』は『出三藏記集』においては羅什訳出の真經として区分されているが、『衆經目錄』七卷では羅什訳であることへの疑念から疑疑とされている（沖本，2010：296）。

いずれにしてもこのような疑疑排斥運動は、經録編纂者らの努力によって続けられたが、数々の經録に示された疑疑の数を比較すると、385年ごろ道安が記した「新集安公疑疑錄」では疑疑の数は26部30巻であったが、510年ごろ僧祐が記した『出三藏記集』「安公疑疑錄共」では46部56巻、730年に智昇が記した『開元釋教錄』では、406部1,075巻が疑疑とされている（沖本，2010：292）。經録編纂者らによる地道な努力に反して、疑疑の数が増加していった背景にはどのような理由があったのだろうか。そこにはインドで生まれた仏教が、中国でどのように変容しつつ受容されていったかを理解する重要な手掛かりがあると考えられる。

疑疑が多く作られていった理由は、それが一部あるいは多くの中国人にとって好まれ必要とされたからに他ならない。その事実は同時にインド伝来の仏典の直訳には物足りなさや、受け入れがたい要素があったということを間接的に意味する。

仏教の受容形態に現れた中国人の思惟方法の特徴を詳細に分析した中村元は、『東洋人の思惟方法』において、抽象的なもの

よりも具象的知覚を重視する傾向が強い点を指摘している。華嚴宗の学者、圭峯宗密は、人間の根源的精神の状態を現すアキラヤ識に関して、清らかな精神を○、汚れた妄心を●の記号で表現し、○（真）と●（妄）の和合をもとにインド伝来の難解で抽象的な教理を視覚表象と陰陽により説明しようとした（中村，1988：34-37）。その理由として中村は、中国語の表意文字による言語表現と言語使用の規則に関する無関心さをもとに、その非論理性を示し、抽象的な思索を不得意とする特徴を論述している（中村，1988：48-55）。これはインド思想が対論によって論理的に発展してきた特徴と正反対であり、インド的な煩瑣な考察などは中国において受け入れられなかったようだ。

さらに、中村は中国人の思惟方法の特徴として、人間本位の現實現世主義的な傾向も指摘している。

インド人は「有ること」(being, das Sein)をbhāva、「存在」「感情・欲望・苦楽感などをもった現実の人間として生存していること」(existence, Existenz)をbhavaという語を用いていいあらわしているが、シナ人はいずれをも「有」と訳している。両者は同じ語根に由来するからである。〔漢訳仏典では両者は区別されていない。〕さらに「有」という語の一般的用法を見ると、「有」は「存在すること」であるとともに、また「人間が所有すること」でもある。すなわち、すべてを人間中心に考えて、人間から切り離された「有ること」というものを考えないのである。（中村，1988：157-158）

これらの特徴は、抽象的な思惟よりも具体的・個別的で、より簡明な現世主義的傾向を示し、中国人の仏教理解においても明らかに現世利益の願望が顕著となることを意味するといえよう。祈祷・呪術による現世利益の願望が大多数の信仰動機であり、解脱に関しても果てしなく輪廻を繰り返しながら修行を継続するというインド的な時間軸を伴う循環的な志向性はなく、禁欲的な生き方もなじまない。つまり、中国人は仏教受容の過程で、現世での悟りもしくは即時的即物的救済の実現を求め、現実世界を肯定的にとらえる仏教へと変容させていったと考えられる。この傾向はインド仏教が示す特徴の対極に位置するものであり、思惟方法の違いが中国において仏教の変容をもたらした要因であると考えられる。

沖本は「疑疑とは、經典という伝統の力を借りつつ、煩瑣な思想を単純化し、現世主義的な利害を重視するところに、その特性が典型的に表れている。この特性は大きく二つに分けられる。一つは世俗的利益の追求であり、一つは思想・実践の簡略化である。」（沖本，2010：299）と指摘し、中国における仏教の変容と疑疑の関係に注目している。

中国における仏教理解の一形態が疑疑として結実し、結果的にそれが人々の精神性に適応しつつ社会に浸透し、仏教受容の布石になったと考えられる。

#### [引用文献]

沖本克己「經録と疑疑」『新アジア仏教史 06 仏教の東伝と受容』佼成出版社、2010年。

落合俊典「疑疑をめぐる問題 —經典の物語化と改作」『大乘仏教のアジア』春秋社、2013年。

中村元『シナ人の思惟方法 東洋人の思惟方法II』春秋社、1988年。